祖母に学ぶ小児看護
—がまんさせる母親と言い聞かせる祖母—

開催日　平成 17 年 10 月 28 日

講　師　本学講師　森　田　恵　子

1．はじめに

近年、少子化を背景に、一人ひとりの子どもの存在が今までにない意味を持ち、様々な育児の難しさや家族間の緊張を生みだす傾向にあります。

小児看護は、今の時代に生きる子どもと子どもを生み育てることを決意した家族を対象に、彼らの健康的な生活と健康的な生活を創りだす能力を獲得するよう援助します。

今回は、受講者の多くが子育てを終えた方々であることから、「子どもと家族」の今日的な課題を共有し、その上で子育てをサポートする手だてを共に考えることにしました。

2．子どもと家族の今昔

1）個人の問題となった《結婚》

家族は、《結婚》に始まります。昔の結婚は、その個人・家族・地域が、例えば嫁を迎える覚悟があり、迎える家・地域の承認を必要とする出来事でした。しかし、今では結婚をする二者間の気分的高揚（ムード）や、愛のない「好き」だけで始まることもあります。現代の結婚は、家族・地域の繋がりの中で作り出される出来事ではない傾向が強いです。

2）個人の問題となった《子どもを持つこと》

家族の発達は、子どもの誕生によって発展します。その昔《子どもの誕生》は、人間の力を越えた決定（神様からの授かりもの）であり、子どもは《生まれくる存在》でした。しかし今日の《子どもの誕生》は、個人（母となる女性）の決定であり、持ち物となる傾向が強いといわれています。

3）個人の問題となった《子どもの健康》

受講者には、約900グラムの低出生体重児人形と一般的な約3000グラムの新生児人形を抱っこしていただきました。そして低出生体重児の軽さ、手足の細さと同時に、何よりも本来赤ん坊の持つ人を引きつける「かわいさ」に乏しい、触れるのも「こわい」感情を引き出すことに気づいていただきました。

子どもを生み育てていく過程で、子どもが病気になることは、健康なからだを作るうえで欠かせない経験です。昔は、子どもの病気を《人生の営み》として静かに向き合いました。しかし今日、特に母親にとって子どもの病気は、屈辱的な《失敗体験》として意味づけされ、病気の子どもと向き合う上で「こわさ」を引き出す傾向があります。

3．子育て支援の“手”

子どもが病気になると、母親はぐずって眠れない子どもを、抱きしめます。これは、《包み込む手》として、とても大切なかかわりです。しかし、同時に子どもの《心とからだを抑制する手》にもなり、子どもにがまんをさせる傾向を生み出します。そこで、祖父母の役割が重要となります。祖父母が孫の頭を撫で、額や頬に添える手は《すくい上げる手》として、子どもの安心と喜びを引き出し《心とからだを開放する手》となります。

どうぞ、孫の力を引き出す祖父母の“魔法の手”を差し伸べてください。